

主な「世間」の見解整理と社会構成主義の視点からの考察

小倉泰憲
(理学部)

1 はじめに

ひきこもりや親の介護などの問題を抱える人の中には、世間体を気にして他者に相談できない人が存在する。ひきこもりは「日本でしか見られない文化依存症候群」(心理学辞典普及版, 2005)であり, 日本文化に強く関わるものである。ひきこもりの背景には, 家族や本人の病気, 親の介護, 離職(リストラ), 経済的困窮, 人間関係の孤立などの複合的課題がある(KHJ 家族会, 2019)。すなわち, 何か一つの社会問題に着目したとしても, 結局は他の社会問題も関係してくる。

ひきこもりと関連する社会問題の例として, 不登校や介護, 失業, 虐待を取り上げてみる。国重(2013)は「自分の子どもが学校に行けなくなったとき, 保護者や肉親は世間体を大変気にする」としている。また, 介護サービスの利用状況については, 厚生労働省(2016)の資料の中に, 認知症の母を抱えた人が世間体を気にしてデイサービス利用を拒否したという記述がある。廣川(2006)は, 失業に伴い, 実に多くのものを失うが, その一つに世間体が含まれているとしている。さらに, 虐待の問題の中には虐待死がある。子どもの虹情報研修センター(2018)は, 既婚の女性が夫以外の男性との間に子どもができたものの世間体を気にして0歳児を殺害するケースが多いと指摘している。

このように世間体という言葉が様々な社会問題の中に登場する。そもそも世間体とは, 世間に対する自己の見栄や体面を意味する。したがって世間体について考えるためには, その前に世間について明らかにする必要がある。しかし, 世間がどのようなものなのかについては複数の見解があるものの, 必ずしも明確に整理されているとは言えない。世間を科学的に扱い, 得られた知見を応用し, 実践に活かすためにも, これまでの見解を整理することに意義があると考えられる。以上のことから, 本論文は世間に関する主な見解を概観することとした。

2 方法

専門分野の辞書・辞典と書籍や論文, 公的資料を中心に整理することとした。それぞれ巻末に「専門辞書・辞典」及び「書籍・論文・資料」として掲載した。このうち, 専門分野の辞書・辞典を論文中で記載する場合, 編著者名を示すとどのような種類の辞書なのかが分かりにくくなる。そこで, 辞書・事典に関しては「心理学辞典(1999)」というように辞書名と発行年を記載した。

調査対象とした言葉は「世間」及び「セケン」である。本論文中では, 引用した文献中の表記をそのまま用いているので「世間」と書く場合もあれば「セケン」と書く場合もある。しかし, 特に区別する必要がない限り, 基本的には「世間」と書くこととした。

以下, 「世間」の概略に関する記述を第3章にまとめ, 定義に関する記述を第4章にまとめた。

3 「世間」の概略

1) 西欧との歴史的関連の視点から見た世間

世間という言葉は日常生活で使われている。しかしながら, そもそも世間がどういうものかについて正面から取り組んだ書籍や文献はそれほど多くはない。そのような中, 阿部の一連の取り組みは注目に値する(たとえば, 阿部, 1995; 阿部, 1997; 阿部, 1999; 阿部, 2001)。

阿部(1999)は歴史学者として西欧文化を研究した。そこで12世紀ころまでは「個人がない」という点で西欧にも日本の「世間」と類似のものが存在したことを見出した。その後, 西欧では「世間的なものが原始的な宗教の特徴を有することから, キリスト教の普及とともに否定・禁止され, 次第に無くなったと考えられる。一方, 日本では時代と共に形を変えつつも現代に至るまで残ったと考えられる(小倉, 2019b)。

阿部は「世間」を「個人個人を結ぶ関係の環」(阿部, 1995)だとしている。さらに「人々の生活の枠組で

あり、人々の世界観でもあった。生活の基準でもあった」(阿部, 1997)としており、ただ一つの定義をせず、複数の角度から説明している。

2) 翻訳語としての「世間」と「社会」

阿部(1995)によると、「社会」という言葉は明治10年(1877年)に西周が society の訳語として作り、その後定着したものである。この時、40以上の訳語候補が考えられたが、その中には世間という言葉も入っていた。つまり、翻訳語としてみた場合、「社会」と「世間」は同じカテゴリーとして扱われたのである。

一方、同時期の1876年(明治9年)年に発行された福沢諭吉の「学問のすすめ」第17編に「社会」と「世間」の記述がある(福沢・齋藤, 2009)。福沢は「社会」は良いものであり、これに対して「世間」は悪いものとした(柳父, 1982)。

この「学問のすすめ」に対応するように社会学事典(2010)には次のように書かれている。

「翻訳語としての『社会』がいったん定着すると、『世間』との用法の違いがしだいに明らかになっていく。端的に示せば、『社会』の意味は抽象的であり、肯定的である。『世間』の意味は具体的であり、否定的である。」

ここで一つ疑問になるのは、「世間」は明治以前から否定的な意味を有していたのか、という点である。この点について、滝川(2013)は明治以降の「世間」と江戸時代までの「世間」の違いについて検討し、次のように記述している。

「近世(前近代)における『世間』なる関係世界は、こわいもの、きびしいものというよりも、基本的に『やさしき心入れ』の世界と捉えられていたのではないか」

つまり江戸時代までの「世間」は否定的な意味を持たなかったという指摘である。そして滝川(2013)は次のように指摘している。

「わたしたちがいま『世間』と呼んでいるものは、近代化の過程で生成されてきたいわば『近代・世間』で、もともと日本にあった江戸時代までの『原・世間』とは性質が異なるものではないか。」

以上をまとめると次のようになる。翻訳の観点において「世間」は「社会」と同じカテゴリーとして扱われた。そして、江戸時代までは特に否定的な意味を持たなかった「世間」という言葉は、明治に入ってから翻訳語の「社会」と対比するものとして扱われ、次第に否定的なニュアンスを持つようになった。

なお、翻訳語としての「社会」は丁寧に表現すると「西欧社会」とか「欧米社会」というべきであろう。単に「社会」としてしまうと誤解や混乱が生じやすい。たとえば「社会と日本社会は違う」と記述できることになるが、これは非常にわかりにくい。「西欧社会と日本社会は違う」と書けばわかりやすい。以上のことから、西欧社会という意味で「社会」という表現を用いる場合はこの点を意識した方がよい。

3) 世間の構成原理

阿部(1995)は、「世間には厳しい掟」があり、「その背後には世間を構成する二つの原理がある。一つは長幼の序であり、もう一つは贈与・互酬の原理である」としている。その後、阿部(2001)は「共通の時間意識」を加え、三つの構成原理の存在を示した。

佐藤(2001; 2017)は阿部の考え方を発展させ「呪術性」の要素を加えた。また、鴻上(2009)は、「差別的で排他的」を加え、「世間」は5つの原理から構成されるとした。整理すると次の5つになる。

1. 贈与・互酬
2. 長幼の序
3. 共通の時間意識
4. 差別的で排他的
5. 呪術性

これらの表現は日常生活で使われることが少ない。また「差別的で排他的」という表現には否定的な意味が含まれている。しかし、滝川(2013)によると必ずしも否定的とは限らない。こうした事情を踏まえ、各構成原理の名称を日常的な表現、非評価的な表現に変えることとした。今回は20名程度の大学生に意見を聞き、「恩返し」「上下関係」「共通意識」「ウチとソト」「自然宗教」と言い換えた(小倉, 2019a)。以下に各構成原理の概要を記す。

恩返し これは贈与・互酬（阿部，1995）に該当する。物をもらう，あるいは何かをしてもらう（行為）ことに対し，同じ量を返すということを目指す。物や行為を「恩」として捉え，相互に依存しあう特徴がある。西欧では契約が重視されるが，「世間」では契約よりも恩返しが重視されることが少なくない。

上下関係 これは長幼の序（阿部，1995）に該当する。年齢や性別，社会的地位に応じて一人ひとりに上下（主従）の序列があるというものの見方である。この上下関係の特徴は，ある集団の構成員一人ひとりについて詳細に上下を定めるという点にある。

共通意識 これは共通の時間意識（阿部，2001）に該当する。時間感覚が「みな同じ」という意識のことである。しかし，時間に限らず，同じものを選び，同じ行動をするという特徴もあることから「共通意識」とした。

「共通の時間意識」とは，過去から将来にわたって，みな同じ時間軸で生きることを意味する。時間を共通にすることは，集団行動においてはタイミングを合わせる（同期）の意味もある。

ウチとソト これは「差別的で排他的」（鴻上，2009）に該当し，人間関係をウチとソトで区別する意識から生ずるものである。ウチの人に対しては極めて優しく，安心できる居場所を提供するものである。一方，ソトの人に対しては差別的に対応することもある。ただし，ここでいう差別は積極的なものというより，見てみぬふりというような無視を意味することが多い。また，ウチは一つだけであり，同種類の複数集団に同時に所属することを嫌うという特徴がある。

自然宗教 これは呪術性（佐藤，2001；2017）に該当する。自然や事物に超越的（絶対的）なものを感じるという原始的な宗教感覚を表している。一神教としての創唱宗教と区別する意味での自然宗教という言い方でもある。

自然宗教の特徴として「天から与えられたものごとく個人の意志ではどうにもならない」（阿部，2001）というものがある。「世間は変えられない」という言い方はここから来ていると考えられる。

以上が「世間」の主要な構成原理である。これら5つ

の構成原理の妥当性については，次の社会学理論応用事典（2017）の記述が参考になる。

「神島二郎は，日本の都市を『群化社会』として把握した（神島，1961）。彼は，日本人にとって共同体的秩序の原型は，『第一のムラ』である自然村にあるという。自然村の秩序原理とは，神道主義，長老主義，身分主義，家族主義，そして自給自足主義である。近代化の過程で『第一のムラ』は崩壊していき，その秩序原理だけが擬制村＝『第二のムラ』として生き残った。」

日本の神道は古くは自然の神であり（梅原，2003），神道主義は「自然宗教」に対応する。長老主義と身分主義は「長幼の序」に対応する。家族主義は必ずしも明確ではないが「差別的で排他的」に関連していると思われる。また，家族主義は常に一緒に生活するという意味では「共通の時間意識」も関係する。自給自足主義は「贈与・互酬」に対応すると言えるであろう。

したがって，神島（1961）の見解は，阿部（1995）・佐藤（2017）・鴻上（2009）による5つの構成原理の妥当性を支持するものである。

4) 空気と世間の関係

次に示すように「空気」と「世間」には二つの共通点がある。

一つ目は基準としての共通点である。山本（1983）は「空気」について「非常に強固でほぼ絶対的な支配力をもつ『判断の基準』」だとしている。一方，阿部（1997）は「世間」を「生活の基準」だとしている。滝川（2013）は「世間」を準拠だとしているが，準拠には基準の意味が含まれている。つまり「空気」も「世間」も基準として働くものである。

二つ目は宗教的な要素の共通点である。山本（1983）は「絶対的」という表現を用いている。ここでいう「絶対的」というのは，逆らえないという点で神の絶対性と同じ意味である。「世間」の場合，神に該当するのは自然宗教になる。つまり，「空気」も「世間」も宗教の要素を有すると言える。

結局，「空気」は「世間」の特徴を部分的に有しているものであり，「世間」の下位概念だと考える事もでき

る。鴻上(2009)は「空気」のことを『世間』の五つのルールのうち、何か欠けているか、揺らいでいると感じられるもの」と定義している。この定義も「空気」が「世間」の下位概念であることを支持すると言えよう。

なお、一般に構成原理とルールは同じではない。しかし、鴻上(2009)は世間が有する5つの構成原理が全てルールそのものであると捉えている。前述のように「世間」は明治以降になってから否定的な意味を持つようになったと推測される(滝川, 2013; 柳父, 1982)。このことは、明治以降の「世間」が厳しいルールとして機能するようになったことを示唆するものでもあり、鴻上(2009)もこの観点で捉えたとすれば整合性がある。

冷泉(2006)は空気を一対一の会話における空気と、三人以上の場における空気に分けて扱い、前者を「関係の空気」、後者を「場の空気」と呼んだ。その上で空気の本質は「一対一の関係性そのもの」であり、必要なものだとしている。これに対し、「場の空気」は問題を有するものだとしている。

冷泉(2006)の主張と、「世間」が明示以降、否定的な意味を持つようになったという指摘(滝川, 2013; 柳父, 1982)を次のように関連付けることができる。明治以前の「世間」は「関係の空気」が主であり必要なものであったが、明治以降は「場の空気」が台頭し、問題が多くなった。

なお、冷泉(2006)は「関係の空気」に関して次のように述べているが、これは重要な指摘である。

「空気を維持するために、話し手と聞き手の間で会話スタイルが共通化されるように選択されていく。この作用は時には、新語や造語が濫発され、瞬間に広がっていく原因ともなる。」

このことは「関係の空気」が集団に対して一斉通知する効果があるとも解釈できる。逆に、この一斉通知を受け取れない状況が「空気が読めない」状況になるとも言える。

4 「世間」の定義

この章では、主として世間の定義に関する見解をまとめた。この際、必ずしも明確に定義したものもあれば、そうでないものもある。

1) 人間関係としての世間

世間を人間関係あるいは関係性の視点からとらえたものとして、社会心理学事典(2009)の「人間関係と文化」の項に「セケン」に関する記述がある。ここでは、この中から中根(1967)、Lebra(1976)、土居(1971)、井上(1977)の考えをまとめておく。

中根(1967)は、タテの関係が日本社会の人間関係を特徴づけているとした。その特徴とは、西欧での「個人」ではなく、所属組織などの「場」が支配的であり、「ウチ」と「ソト」の区別を強く意識するというものである。中根(1967)は、その著書の中では「世間」という言葉を明示的には用いていない。しかし、「タテの関係」は前述の構成原理の「上下関係」に対応しており、また、「ウチ」と「ソト」は構成原理の「ウチとソト」に対応している。

Lebra(1976)は日本の公の社会関係をセケンとし、自分の面子(めんつ)と他者の面子の両方を守ることに力点が置かれると指摘している。面子とは体面もしくは面目、世間体のことである。

「はじめに」で様々な社会問題について触れ、世間体が関わっていると述べた。Lebra(1976)の指摘を考慮すると、この世間体は数ある要因の一つというよりも、根本的で主要な要因だと考えられる。

土居(1971)は、「日本人にとって内と外の生活空間は、厳密に言えば三つの同心円からなり、一番外側の見知らぬ他人に対しては一般に無視ないし無遠慮の態度が取られる」としている。

井上(1977)は土居の議論を踏まえ、集団をミウチ・セケン・タニンという3種に分類した。ミウチは、家族に代表されるような心理的一体感が強く互いに甘えられる関係性である。セケンは、ミウチの外側にあって互いに遠慮が働く関係性である。タニンは、セケンの外側にあって甘えも遠慮も存在しない疎遠な関係性である。

ミウチ・セケン・タニンという視点は、前述の構成原理の「ウチとソト」に対応するが、井上(1977)は、より厳

密に説明したと言える。

2) 準拠枠としての世間

滝川 (2013) は「世間」は準拠枠だと言っている。ここでいう準拠枠とは、前提・基準・文脈・背景・体系といった意味を有する枠組みのことである (たとえば、岩波哲学・思想事典, 1988 ; 社会心理学小辞典, 1994)。

滝川 (2013) は、準拠枠が共同性になると考え、「社会は共同体を本質とし、世間は共同性を本質としている」と述べている。そして、「共同体」と「共同性」という言葉の違いについて次のように考える必要があると主張している。

「共同体」(コミュニティ) は組織のかたちをなしたもので、①それを構成する成員、②成員を結び合わせるべき絆(きずな)、③その成員を律する規範、という三本柱によって成り立っている。たとえば会社という共同体には、①社員、②忠誠心、③社内規則がある。

これに対し、「共同性」は複数の人々が共有する観念であり、三本柱は不明確である。たとえば、不祥事を起こしてテレビや新聞で「世間をお騒がせして申し訳ございませんでした」と謝罪会見する場合、誰と誰が「世間」の構成員なのか名簿を作ることはできないし、そのような不特定の人たちが同じ理由で結ばれているとは限らない。また、「世間」が許すかどうかの基準は、マスコミ報道の仕方に変化する。なお、共同性が具体的な組織のかたちをなすと、これは共同体になる。

滝川 (2013) の考え方をまとめると、「世間」は準拠枠であり、共同性を本質とする。これに対し「社会」は共同体を本質としており、「世間」と同じカテゴリーではない。

この一連の滝川 (2013) の考え方には論理的な一貫性があり、合理性がある。さらに、準拠枠という既存の学問上の知見を用いることができるので、準拠集団の考え方など、社会学や心理学の豊富な知見を活用できるというメリットがある。

3) 共同幻想としての世間

佐藤 (2009) は、『世間』は本質的にいえば、三人以

上の関係において存在する共同幻想、つまり複数の人間が持つ共同観念である」と説明している。共同幻想とは、人間が集団を形成するときに生み出される幻想のことで、家族・社会・国家・民族など個人を超える集団の秩序やそれへの帰属を理解するための観念のことである。

もともと共同幻想とは、吉本 (1968) が主張した概念だが、ここでは共同観念と同じものとして扱っている。共同幻想 (共同観念) は、滝川 (2013) が主張している「共同性」に該当する。

佐藤 (2009) は「世間」を共同幻想 (共同性) だとしているのに対し、滝川 (2013) は、共同性を生み出す基盤である準拠枠が「世間」だとしており、厳密には異なる捉え方をしている。

4) 環境・空間・場としての世間

世間を環境や空間、場と関連させて捉える立場がある。

中村 (2013) は世間を「人々の生活の場を提供している環境への命名である」としている。一方、社会学心理学辞典 (1995) によると、井上 (1977) は世間 (セケン) を「各自の準拠集団を包括する生活空間」と定義している。

ここで用いられている「環境」や「空間」は抽象的な意味で用いられていることもあり、両者の違いは必ずしも明確ではない。少なくとも「場」や「集団」よりも上位概念として扱っているようである。

板倉 (2019) は関西圏と関東圏の差異を例として取り上げ、自らが生まれ育った地域に方言をはじめとした独自の「場」の伝統 (意識) が残っていると主張した。そして、この「場」の意識のことを「世間」として扱っている。中根 (1967) は「場」の例として、一定の地域や所属機関をあげていることから、板倉 (2019) の「場」と同じ意味で用いていると言える。

なお、中村 (2013) は「世間」に関連する言葉として「世」と「世の中」を取り上げた。これらをいずれも環境というカテゴリーでとらえ、上位概念として「統合世間」を提唱した。これは、『集団』ほど直接的存在では

なく、『社会』ほど広大で間接的でもない、中間的な環境（第3極的環境）の総称であるとした。

5 考察

1) 「世間」の肯定的な側面

第3章2)で触れたように、明治になって翻訳語としての「社会」を定着させる際、「世間」と対比させた。この結果、「世間」に否定的な意味が付加されたと考えられる。滝川(2013)や柳父(1982)が指摘しているように、明治以前は中立、あるいは肯定的な意味もあったと推測される。ここでは「世間」が有する肯定的な側面を考えてみることにした。

肯定的な側面の主たるものは、集団の秩序作りあるいは統率に有利だという点であろう。例えば、東日本大震災が起きたとき、略奪も暴動も発生せず(佐藤, 2017)、秩序が保たれた。これは世間の構成原理のうちの「共通意識」が作用し、皆同じ行動をしたためだと考えられる。また、避難所内で被災者同士の助け合いがあったとのことだが、これは「恩返し」が作用し、困った時はお互い様という状況になったとも解釈できる。

次に、集団の統率に求められることを考察する。

2) 集団統率に必要な事

集団の優先 集団の統率に必要な事として第1に求められることは、何事においても個人より集団を優先させる意識であろう。そこで重要になるのが「世間」の5つの構成原理のうちの「自然宗教」ではないかと思われる。「自然宗教」は自然や事物に絶対的なものを感じるものであり、神のごとく受け止められる側面がある。これは「自然には逆らえない」という感覚から来ると推測される。このことから、ある集団に「世間」がある場合、「世間は変えられない／逆らえない」という意識が生まれると考えられる。そして、この結果、「集団の決定には逆らえない」という意識につながる。

集団行動の実行場面での統率 次に重要となるのは、実際に集団行動する場面での統率と日ごろの集団メンテナンス(維持・管理)であろう。

集団行動する場面では、迅速な意思決定をし、構成員に命令を伝えることが必要になる。そのためには、少数ある

いは一人が意思決定した方が良い。「世間」の構成原理の一つである「上下関係」はこの場面で有効に機能する。上下関係のトップの人間が意思決定をすると、それ以下の全ての人は一斉に命令に従う。

なお、上下関係のトップの人間が意思決定をするといっても、実際にはトップが全ての権限を有しているとは限らない。トップを含む小集団で形成される「空気」が判断基準となることが少なくない。また、冷泉(2006)が指摘しているように「空気」には一斉通知の要素がある。したがって、ある瞬間に一気に意思決定がなされ、それが集団全員に一気に伝わることも珍しくない。逆に、その空気を受け取ることができない(空気が読めない)構成員は集団内で浮いてしまう。

集団行動の場面でもう一つ重要なことは集団構成員の行動が同期しているということであろう。各自、役割に合わせて異なった行動をすることを考えられるが、その際、行動のタイミングを合わせる必要がある。このためには「世間」の構成原理の一つである「共通意識」が有効になる。

さらに、集団行動場面ではお互いの協調行動も大切になる。ここでは行動面の「共通意識」が有効になる。また、協調行動の際、「恩返し」も作用し、助けられたら助け返すといった意識が生まれ、高度な連携プレーが可能になる可能性が高い。

日ごろの集団メンテナンス 集団を維持・管理するためには、日ごろの集団への服従心や忠誠心、仲間意識の醸成が必要になると考えられる。

集団の中に人を留まらせるために、「世間」は、大きな安心・安全を提供する。居場所が提供され、その中では助け合いや相互依存が許される。相互依存は「恩返し」と関係する。なお、この相互依存は土居(1971)が指摘する「甘え」に該当する。

居場所は物理的な居場所と心理的な居場所に大別できる。心理的な居場所は、古くは家長やその妻などというように「立場」として提供されるものであった。現代では部長とか課長というような企業の中の役職も同じ意味を持つ。

集団維持のためには、誰が集団の構成員なのかを明確にしないといけない。枠を明確にする必要があるという

ことである。これは「世間」の構成原理の「ウチとソト」に関係する。お互いに頻繁に挨拶しあうのは、お互いにウチであることを確認するための行為だと解釈できる。

このほか、集団の維持においては、その中に居場所が無くなった人の扱いも重要になる。ルールとしての「恩返し」や「上下関係」、「共通意識」に従わないとウチからソトに追い出される可能性が高い。また、病気や加齢などによって集団に貢献できなくなった人もウチにいらなくなる可能性がある。

ここでいうソトは①実際に集団から離れる場合もあれば、②形式的には集団に属しながら他の人から無視されたり忘れ去られるという二つの場合が考えられる。

①の実際に集団から離れる場合については、強制的に追い出される場合と自らソトに出ていく場合があるであろう。これは目に見えることなので比較的わかりやすい。しかし、②については村八分にされた場合や、何らかの形で存在を隠す場合（ひきこもりも含まれる）、あるいは自殺に追い込まれる場合が考えられる。

①と②のいずれにも共通するのは、消極的な差別、あるいは無自覚な差別である。これは、ウチの人のことは意識するが、ソトの人のことは意識の外にあるということである。そもそも意識していないので差別しているという自覚すらないであろう。

以上、集団統率に必要な事は何かという視点で考察した。まず「自然宗教」の絶対性が土台に据えられる。その上で、集団行動の実践では「上下関係」での指揮命令系統が機能する。命令を受けた構成員は「共通意識」に基づいて高度な連係プレーを行う。

一方、日頃の集団の維持としては「恩返し」によって仲間意識を醸成させ、安全・安心な居場所を提供する。何かあったら互いに助け合う相互依存が基本になる。また、「ウチとソト」の意識を持ち、仲間とそうでない者を常に明確化する。ウチの人に対しては手厚い支援をする。

以上の観点から整理してみると、「世間」は集団統率に極めて有利な仕組みになっていることがわかる。

3) 社会構成主義の視点からの考察

第4章では「世間」の様々な定義を整理した。「世間」を人間関係として捉える立場もあれば、準拠枠だとする

立場もある。また、「世間」を共同幻想や環境・空間・場としてとらえる立場もある。このような状況に対し、「世間」は多義的だと言う事もできるであろう。しかし、多義的だとしてしまうと「世間」を科学的に扱うことが難しくなる。そこで、ここでは科学的に扱うための枠組みを検討した。

人間をめぐる現象の理解には、自然科学と人間科学の両方が必要となる（杉万，2005）。本論文では「世間」を基本的に人間科学の立場で捉えることとする。この際、社会構成主義をメタ理論とする。ここでいうメタ理論とは理論の前提となる理論のことだが、研究哲学という言い方もできる（杉万，2005）。なお、もう一方の自然科学は論理実証主義をメタ理論としている。

社会構成主義とは、言葉がわれわれの生きる世界をかたちづくる（野口，2002）と考える立場であり、「言葉」と、そのやりとりである「対話」を重要視する。

社会構成主義の立場に立つと、論理実証主義とは大きく異なる面が出てくる。論理実証主義では、物事には本質があると考えますが、社会構成主義では本質が存在することを前提条件とはしない。社会構成主義では、理論や法則、普遍的な真理（本質）と言っているものは、専門家などの一部の人間同士が対話した結果として作り出されたものであり、必ずしも絶対ではないと考える。正解や真実は複数あっても良いと考える。このように社会構成主義では、自然科学だけが絶対に正しいとは考えず、専門家の言うこと、あるいは権威を持った人のいう事も絶対に正しいとは考えない。常に複数の視点、見解が存在すると考える。

4) ディスコース

社会構成主義には「人々は自分たちの考え、感情、行動を決定する社会的状況をディスコースからつくりだしていく」（Monk et al., 2008）という考え方が中心にある。ディスコースとは、物事や考えについて言葉で表現されたものである（Crossley, 2009）。たとえば「世間」では「目上の人には敬語を使わなければならない」というきまりがあるが、これもディスコースの一つである。

論理実証主義をメタ理論とした場合、正解はただ一つでなければいけないので、「世間」の定義は一つしか存在しないと考えるようになる。この結果、「世間」の定義と

して、人間関係や準拠枠、共同幻想、環境、空間、場のいずれか一つだけを選び、残りを否定する必要が出てくる。この場合、否定されたものが持っている意味や有用性までも捨てる可能性が極めて高くなる。

これに対し、ディスコースという視点でとらえた場合、「世間」の定義が複数存在するという事は、解釈を豊かにすることだと考える。たとえば、社会学や心理学といった学問的立場で厳密な議論をしようとした場合、「世間」と「社会」は異なるカテゴリーの概念であり、「世間」を準拠枠だと定義することで厳密な議論が可能になるであろう。しかし、実際の生活の中では「世間」と「社会」を区別しないことも多く、こうした現状も無視できない。同じカテゴリーだととらえる立場にも有益な面がある。

5) 「世間」をディスコースで捉える

「世間」をディスコースの視点からとらえることで、対人支援や自己理解に役立てるといった実践に展開しやすくなる。たとえば、「世間」には「目上の人を呼ぶ捨ててはいけない」とか「人様に迷惑をかけてはいけない」といった数多くの常識がある。こうした常識はあまりにも「あたりまえ」になっているため、疑問に感じることすら無くなりがちである。この結果、他者に迷惑をかけるように常に意識し、自分の行動を極力制限し、生き苦しくなってしまう人も出てくる。これらの常識一つひとつをディスコースとしてとらえた場合、別の視点も出てくる。

ディスコースには様々なものがあるが、このうち、「ひとつの側面しか提示しないものの、非常に大きな影響力を持つ」ものを支配的なディスコースと呼ぶ(国重, 2013)。支配的なディスコースは往々にして人の考え方や行動を縛り付ける。

社会構成主義では、こうしたディスコースはあくまで言葉で作り出されたものとして扱う。このため、あるディスコースが否定的な状況を生み出すのであれば、それを構成する言葉を書き換えれば良いと考える。

このような立場を取る際、第3章で取り上げた世間の5つの構成原理が有用になる。たとえば、「世間」が「恩返し」や「上下関係」といった5つのディスコースを生み出していると捉えることができる。その上で5つの構

成原理それぞれについてどのようなディスコースがあるのか、今の自分にどの程度の影響があるのかといったことを点検することで、「世間」を客観的に見ることができるようになる。実際にこのような取り組み試験的に始めたが(小倉, 2019b)、さらなる実践については別途報告することとする。

5 結論

「世間」に関する見解は多数存在する。本論文では現時点で判明している主な見解の概略を整理した。その結果、「世間」の定義が複数存在しており、統一見解は見当たらないことがわかった。しかし、こうした状況は、社会構成主義をメタ理論とする人間科学の視点で捉えることで矛盾なく説明できる。

さらに、社会構成主義の中心的な考え方であるディスコースの視点で捉えることで、対人支援や自己理解に役立てる可能性が出てくることが示唆された。

6 課題

本論文では「世間」に関する書籍や論文、辞書を調査対象としたが、網羅性(十分に網羅できているかどうか)に関しては検証できなかった。情報の偏りや抜けがある可能性も高い。たとえば、「世間」という表現を明示的に用いていなくとも、日本文化について言及したようなものも多数存在するであろう。こうした側面の検討も必要になると思われる。

また、第3章では世間の構成原理として「贈与・互酬」「長幼の序」「共通の時間意識」「差別的で排他的」「呪術性」を取り上げた。今回はこれらを日常的な表現に言い換え、「恩返し」「上下関係」「共通意識」「ウチとソト」「自然宗教」とした。

この際、「呪術性」を日常的な表現で言い換えようとしたが、適切なものが見つからなかった。鴻上は「神秘性」(鴻上, 2009)、あるいは「ミステリアス」(鴻上, 2019)と言い換えている。神島(1961)の「神道主義」という表現を使う事も考えられる。しかし、いずれも日常的とは言い難い。こうした点についても、さらに検討の余地があると思われる。

専門辞書・辞典

- 社会学事典 2010 日本社会学会 社会学事典刊行委員会編, 丸善.
- 岩波哲学・思想事典 1988 廣松渉・子安宣邦・三島憲一・宮本久雄・佐々木力・野家啓一・末木文美土編, 岩波書店.
- 社会学心理用語辞典 1995 小川一夫監修 (改訂新版), 北王子書房.
- 社会学理論応用事典 2017 日本社会学会 理論応用事典刊行委員会編, 丸善.
- 社会心理学小辞典 1994 古畑和孝編, 有斐閣.
- 心理学辞典 1999 中島ら編, 有斐閣.
- 心理学辞典普及版 2005 Andrew M. Colman 著; 藤永保・仲真紀子監修, 丸善, vii頁 (「日本語版へのまえがき」).

書籍・論文・資料

- 阿部謹也 1995 『「世間」とは何か』講談社, 175頁.
- 阿部謹也 1997 『「教養」とは何か』講談社.
- 阿部謹也 1999 『日本社会で生きるということ』朝日新聞社, 62頁.
- 阿部謹也 2001 『学問と「世間」』岩波書店, 112頁.
- 板倉栄一郎 2019 『「世間論」小考 日本の近代化と『世間論』研究の射程』『北陸大学紀要』, 47, 11-24頁.
- 井上忠司 1977 『「世間体」の構造—社会心理史への試み』日本放送出版協会.
- 梅原猛 2003 『梅原猛の授業 道徳』朝日新聞社, 36頁.
- 小倉泰憲 2019a 「『世間』のディスコースを導入したアサーション・トレーニングの予備的検討」『日本カウンセリング学会第52回大会発表論文集』, 75頁.
- 小倉泰憲 2019b 「日本特有の『世間』の要素を取り入れたディスコース・アプローチ—自分を縛り付けているものを緩めるワークの予備的検討—」『日本産業カウンセリング学会第24回 (関東) 大会発表論文集』56-59頁.
- 神島二郎 1961 『近代日本の精神構造』岩波書店.
- 国重浩一 2013 『ナラティブ・セラピーの会話術』金子書房, 55-96頁.
- Crossley, M. L. 2000 *Introducing Narrative Psychology*. Open University Press UK Limited. (角山富雄・田中勝博監訳 2009 『ナラティブ心理学セミナー』金剛出版, 80頁)

- KHJ 家族会 2019 『長期高齢化する社会的孤立者への対応と予防のための「ひきこもり地域支援体制を促進する家族支援の在り方に関する研究』特定非営利活動法人 KHJ 全国ひきこもり家族会連合会.
- 鴻上尚史 2009 『「空気」と「世間」』講談社, 68-110頁.
- 鴻上尚史 2019 『「空気」を読んでも従わない: 生き苦しさから楽になる』岩波書店, 103頁.
- 厚生労働省 2016 平成27年度版「仕事と介護の両立モデル 介護離職を防ぐために」, 33頁.
- 子どもの虹情報研修センター 2018 「平成27・28年度研究報告書 育児殺に関する研究」, 5頁.
- 佐藤直樹 2001 『「世間」の現象学』青弓社, 67頁.
- 佐藤直樹 2009 『暴走する「世間」で生きのびるためのお作法』講談社, 19頁.
- 佐藤直樹 2017 『目くじら社会の人間関係』講談社, 14-35頁.
- 杉方俊夫 2005 「第4章 社会構成主義と心理学 「内なる心」の観念を超えて」下山晴彦 (編) 『心理学論の新しいかたち』誠信書房, 66-71頁.
- 滝川一廣 2013 「日本の近代化と『世間』の生成」『平成24年度 学習院大学人文科学研究所 特別共同研究プロジェクト 自己・他者・「世間」に関する心理学的研究』, 92-111頁.
- 土居健郎 1971 『「甘え」の構造』弘文堂, 43頁.
- 中根千枝 1967 『タテ社会の人間関係』講談社.
- 中村陽吉 2013 「『世間』心理学から『統合世間』心理学への展開」世間心理学研究会 (編) 『自己・他者・「世間」の心理学』学習院大学人文科学研究所, 4-58頁.
- 野口裕二 2002 『物語としてのケア』医学書院, 17頁.
- 廣川進 2006 『失業のキャリアカウンセリング』金剛出版, 3頁.
- 福沢諭吉著・齋藤孝訳 2009 『現代語訳 学問のすすめ』筑摩書房, 219-220頁.
- Monk, G. D., Winslade, J. Crocket, K. & Epston, D. 1997 *Narrative Therapy in Practice: The Archaeology of Hope*. John Wiley & Sons, Inc. (国重浩一・バーナード紫訳 2008 『ナラティブ・アプローチの理論から実践まで: 希望を掘りあてる考古学』北大路書房, vii頁)
- 柳父章 1982 『翻訳語成立事情』岩波書店, 17頁.
- 山本七平 1983 『「空気」の研究』文藝春秋, 22頁.

吉本隆明 1968 『共同幻想論』角川学芸出版.

冷泉彰彦 2006 『「関係の空気」「場の空気」』, 9-54 頁.

Lebra T. S. 1976 Japanese Patterns of Behavior. East-West
Center Books.